

西アフリカ、マリ共和国における芸術教育

— 国立芸術学院と造形美術 —

後藤由佳

1. 研究の目的・方法

本稿の目的は、マリ共和国（以下マリ）における芸術教育の現状について報告を行うとともに、その特徴を明らかにすることである。これまでアフリカの彫刻は、近代西欧の芸術家たちによって生命力に満ちあふれた独自の造形表現を見出され、例えばピカソ（1881～1973スペイン）やマティス（1869～1954フランス）はこれを、「自由な造形」と批評してきた。しかしながら、現状はかつてとは著しく異なったものとなりつつある。このような現代マリにおける芸術教育の特徴を明らかにするため、今回は国立芸術学院（Institut National des Arts）（以下I.N.A）で行われている彫刻の制作過程とそこで見られる特徴に注目する。

参与観察調査及び制作実践は、マリの首都 Bamako を中心に、2001年8月上旬～2002年3月下旬、および、2002年9月の二度にわたって実施した。本稿は、筆者が実施したマリにおける現地調査の結果を基に報告する。

2. 義務教育

本章では、I.N.A の芸術教育の特徴を検討するために、まず、I.N.A 入学以前の小・中学校の造形活動を把握し、義務教育における造形教育の特徴を明らかにする。

筆者は、都市部に位置する Bamako の公立小・中学校（Ecole Fondamentale de Sogoniko B, Ecole Fondamentale de Sogoniko Groupe 1）において、教育指導法に関する参与観察を行った。そこでの教育指導法は、暗記的教授法であり、思考能力や推理能力よりも暗記力を鍛えることに重点が置かれていた。具体的に

は、教員の仕事は既成の知識・技術の一方的な伝達であり、児童や生徒の学習活動も、それに関連する知識・技術の習得となっている。2002年の教科一覧表によると、小・中学校においては、教科に「絵画」(Dessin)があるものの、授業時間数は小学校5～6年生で1週間に1時間に限られている。同様に、中学校においては、家庭科、音楽、絵画の3教科の中から選択の上、1週間に1時間しかない。また、教員がいないなどの理由で実質的には造形教育はほとんど行われていないに等しい。

3. 国立芸術学院

I.N.A は、首都 Bamako にある。この学校は、造形の専門教育が行われており、日本での高等学校課程に相当する職業訓練校である。4年制の男女共学で、6学科16専攻に分かれている。一般教養科目には、フランス語や英語そして幾何学等がある。学科には、アニメーション科、演劇科、音楽科、造形芸術科、工芸科、そして学術研究科が設置されている。マリの公立教育機関の場合、授業料は全て無料であり、I.N.A においても授業料をはじめ、文具、教材、作業着など全て政府が供与している。

彫刻専攻、皮革専攻等の工芸科は、卒業後職人センター (Maison des Artisans) で働く者の育成を目指している。以下に工芸科6専攻 (表3.1) の内容を示す。

番号	(フランス語)	内 容
(1)	木工工芸専攻 (menuiserie)	家具等の実用品の制作を行い、技法と知識を習得させ職人の育成
(2)	金属工芸専攻 (métal)	鍛金制作の技法及び知識を習得し、金属造形の創作力を養成
(3)	機織り専攻 (tissage)	織り技法及び知識を習得し、職人の育成
(4)	装身具専攻 (bijouterie)	銀製を中心に、素材への知識を深めると共に、主に現代のジュエリーの創作
(5)	皮革工芸専攻 (peau & cuir)	羊やらくだの皮革を中心に、素材への知識を深めると共に、鞆や靴などの制作を習得し、職人の育成
(6)	彫刻専攻 (sculpture)	木の素材を用いて、レリーフや立像、ろうけつ染めに用いる木版等の制作を行い、歴史を踏まえた職人の育成

表3.1 I.N.A 工芸科

4. 彫刻制作

筆者は、工芸科彫刻専攻に在籍し自ら教育を受けた。制作実践の結果、以下のような木彫作品を制作した（写真4.1）。本章では、実際に制作方法を学んだことを基に、彫刻専攻の授業について述べる。



写真 4.1

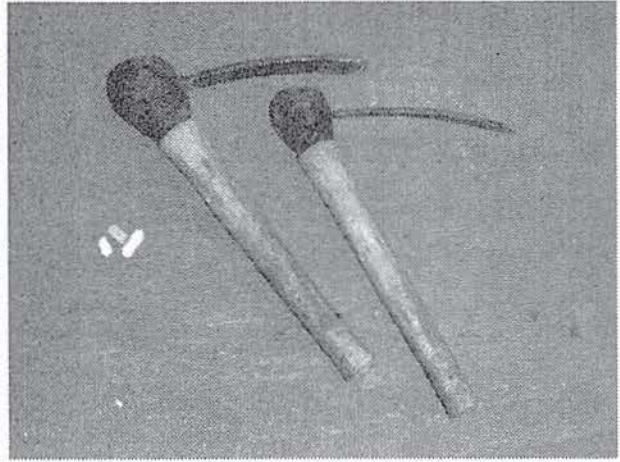


写真 4.2

4.1 道具

本節では、観察した中で注目すべき道具である、鉋（写真4.2）について説明する。鉋は、鉄の刃がついたフランス語で Herminette と呼ばれる大工道具の一つである。今日、日本では荒仕事専用とされている場合が多いが、本来は、丸太から角材を削り出すような荒仕事から細かい仕上げ仕事に至るまであらゆる仕事に使われる。

鉋は、柔らかい素材から硬い素材にまで対応でき、全身像の顔のような細部まで削り、彫ることができる。顔面の目鼻口といった細部にはノミや彫刻刀も使用するが、多くの場合は鉋のみで彫り上げる。

大工道具のなかでも使い方が他とは異なり、刃を自分の方に向けて打ちおろす。鉋は、削るというよりも、はつるといった感じの使い方をする。そうした使い方に応じて、道具自体も頑丈にできている。少々の衝撃では壊れないよう、金属部の刃は、厚く、重く、反り返っている。最初の切口は刃で切るが、その先は少しずつ木目に沿って割りはがすように使う。始めのうちはやや厚めにはつってもよいが、仕上げ段階では薄く長くはつるのがよい。そのようにするため、切り込み

(24)

はつりに移る瞬間の刃の面は、はつる面と平行になっていなければならない。木を左手で支え木製の台の上に置き、右手で柄の中央部よりやや後ろ寄りを持って振り下ろす。鉾の刃が木材に当たった瞬間に止めるように使う。

以下に彫刻を行う際に使用する道具（表4.1）の説明を行う。

番号	道 具	説 明
(1)	チョーク	素材の各面にデッサンを行うのに使用する。デッサンは、消えてもよいためチョークを使う。
(2)	鉾	柄の太くなった頭部に刃の付け根が差し込まれた斧である。あらゆる仕事に使われる。
(3)	ノミ	ノミは平刀を多く使用し削りや彫りを行うが、丸ノミもあると細部を彫る際仕事が容易になる。
(4)	木槌	ノミをたたくのに使用する。
(5)	木工用ボンド	合成樹脂系木材用接着剤。材木のひび割れた箇所や木の粉と接着剤を練ったものを埋め込むか、又は、埋め木に接着剤をつけ打ち込む。
(6)	ヤスリ	木材用ヤスリ。紙ヤスリ。
(7)	蜜蝋	木材の光沢と表面保護のため使用する植物性のワックス。
(8)	その他彫刻に使用される道具	両刃ノコギリ、固定用万力

表 4.1 彫刻に用いる道具

4.2 制作過程

以下に、学習指導内容（表4.2）の内容を述べる。

番号	学 年	内 容
(1)	1 年 生	彫刻における立体としての形態の表し方と、道具や材料の生かし方などの基礎的技能を身につけるため、木で立方体や直方体、球などの幾何学的な形態を表現する。
(2)	2 年 生	人や動物を題材としたプロポーション構成を理解するため、木で人体と動物の形態を、段階を踏んで表現する。
(3)	3 年 生	彫刻における強調や動勢と、意図に応じた単純化や省略といった構成技能を身につけるため、木で人体の目鼻耳口といった細部と動勢を生かした表現をし、また、材料や表現方法の面での工夫を行う。
(4)	4 年 生	1～3年に学んだ造形感覚や創造的な技能を基に、個人の思いを巡らし考えを練り、自ら課題を設定し自由制作を行う。

表 4.2 学習指導内容

ヤスリで木肌を磨き上げた後、仕上げ作業で作品の保護をし、表面をよりなめらかに整える。これは仕上げ、すなわち彫刻の良さをより強調させるためであると同時に、乾湿から木を守るためでもある。保護剤として、植物性の蜜蝋やカリテ（Beurre de karite）^{註1)}を使用するが、多くは靴墨か、野外彫刻においては車用のペンキによる塗装を使用する。

4.3 学習指導内容

I.N.Aの教員や生徒は、前もって用意されたアイデアスケッチをほとんど使わず、想像した形をそのまま刻んでいく。彫刻の形態は、木材自体の形に基づいて決まることも多く、彫る人の抱くイメージを大切に刻み込まれるようである。生徒による作品は、目鼻口といった細部は最小限に抑えた表現である。

彫刻学習指導法は、現地の人の手によりマリ人のために制作される仮面（Masque）^{註2)}、彫像（Jiri mogoni）^{註2)}、椅子（Sigilan）^{註2)}、といった「モノ」や、旅行者向けの「トゥーリスト・アート」に関する技術指導が行われている。

5. 考 察

本稿の目的は、彫刻教育を事例として、現在のマリで行われている芸術教育の特徴を明らかにすることである。

I.N.Aの彫刻教育は、19世紀以降の近代西欧による芸術教育システムによるものである。制作過程が学習指導内容により画一化され、彫刻専攻の生徒は、一般教養科目で幾何学を学ぶなど体系的な学習指導が行われている。一年生では、木を材料とし立方体、直方体、球といった幾何学的な形態作りなど、立体としての「モノ」の見方や形態の表し方を学ぶ。また、道具と材料の生かし方等、彫刻の技法に関しては、日本での小、中、高等学校、更に、大学における教育学部の美術教育と比べても、I.N.Aは、より基礎的な力を養う段階から指導が行われている。これらは、近代西欧による芸術教育システムの影響を受けた一例である。

I.N.Aで制作されている作品は、人びとのあいだで受けつがれている造形を意識したものではあるが、いわゆる信仰にまつわる器物や像、宗教的な儀礼のため

の特別なものではない。伝統的なモチーフを組み合わせ、構成に工夫を凝らした形態の彫刻となっている。以外にも、観光地や空港へ行けば売られている土産品は、近代西欧による芸術教育を受けた職人により制作されており、I.N.A が「トゥーリスト・アート」を作る技術的基盤になっていると考えられる。

以上のように、現代マリの芸術教育の特徴は、造形品の制作過程が画一化され、体系的な学習指導が行われていた。つまり I.N.A における芸術教育は、旅行者向けの「トゥーリスト・アート」が出来上がるまでの一つの事例と捉えられる。

注釈

- 1) 油量植物、アカテツ科。アフリカ中部、西部の乾燥地域に分布する。種子からシアバター (*Butylospermum paradoxum*) が取れる。種子は約50%の脂肪(シアバター)を含んでいる。これをとるには種子を粉砕して煮沸し、水面に浮いた脂肪を集める。ヨーロッパではこれをせっけん、ろうそくに用い、精製してマーガリン、カカオバターの代用品を作る。アフリカでは脂肪を食料、塗料、灯用として用い、採油かすは家畜の飼料とする。材は堅くて耐久性があり、用材とする。(出典：伊谷純一郎、小田英郎、川田順造、田中二郎、米山俊直、初島住彦『アフリカを知る事典』平凡社、2001年11月、pp.187)
- 2) 4.3 学習指導内容のアルファベット表記は、バンバラ語で、それ以外はフランス語である。バンバラ語とは、マリで使用される20種類以上の言語のうち、マリでバンバラ族を中心に多くの地域で使われている。

引用・参考文献

- 1) 伊谷純一郎、小田英郎、川田順造、田中二郎、米山俊直 『アフリカを知る事典』平凡社、2001年11月
- 2) 金田晉編、吉田憲司『芸術学の100年』勁草書房、2000年6月、pp.141-155
- 3) 佐々木重洋『世界思想1999春26号』世界思想社、1999年4月、pp.26-31
- 4) 川田順造『アフリカの心とかたち』岩崎美術社、1995年2月、pp.102-143
- 5) 吉田憲司『文化の「発見」』岩波書店、1999年5月
- 6) ウイリアム・ルービン編『20世紀におけるプリミティヴィズム』淡交社、1995年4月、pp.211-239
- 7) パトリックメラン、下田文子監訳『アフリカの日常生活』新評論